

部活動紹介

放送委員会

昭和二十七年に誕生した放送委員会。平成十四年には創立五十周年祝賀会を開催するなどOB会活動も盛んである。現在は、五十五周年に向けて記念誌の発行を企画している。

一坪放送室から広々放送室へ

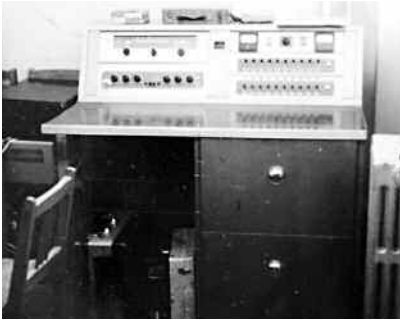
高橋 伸 (昭和39年卒)



入学した昭和三十六年は秋田国体の年。二年生はマスゲームの練習に明け暮れて大変そう。国体は人ごとのように観ていたら、我が家が宮城県選手

の民宿になっていた。陸上競技場に応援に行ったりもした。日新中学時代から放送に関わっていたので、放送部に入ることは初めから決めていた。秋田駅前にあった木造校舎で、入学して落ち着いた頃に放送室に向かった。正面玄関の右側、宿直室の前にその部屋があった。機械室とアナウンス室が仕切られていて、狭いので皆さん立って話をしていた。春が来て、手形大松沢の新校舎に移転することになり、これからはLPの時代とSP

レコードを、残雪の中庭テニスコートに円盤投げをしていた。今思うと、もったいないことをしてしまった。そのころ卓球部が不活発で、部室から近い体育館に、この時とばかりにみんなで卓球をした。これが新校舎になっても続いた。



駅前校舎から持ってきた音卓

三年になって、中村・佐々木君とクラスが一緒となり、放送部クラスと言われた。その教室が部室の直ぐ隣で、先生が教室に入ったのを観て、クラスに向かったものだ。



鈴木奈々子 (平成8年卒)

大切にしたい宝物

高校生活最後のNHK放送コンテスト県大会で、ラジオ番組や朗読など各部門の最優秀賞、金賞が発表され「秋田高校」と聞こえた瞬間、会場内に喜びの叫び声が響き渡った。秋高放送委員会全員が一つになったあの震えるような感動を今でも鮮明に覚えている。子供の頃からアナウンサーになるのが夢だった私は、高校入学後、迷わず放送室へ。当時の放送室には常に明るい笑顔が溢れ、一人ひとりの純粹で真剣な思いが充満していた。放送委員会は、例えて言うならば甲子園を目指す野球部と同じように、年に二回の全国大会出場という目標に向かって皆で一生懸命活動をしてきた。共に笑い共に涙し同じ青春時代を過ごした仲間たち：十年以上経った今、学年を越えたその繋がり



高校2年生 秋のABSコンクール県大会で。みんな笑顔の結果でした！

放送委員会の「今」

委員長 三年

古村 明子

放送委員会は現在十四人日々活動している。例年に比べると非常に少ない人数だが個々のつながりはとても密であり、今回のNHK杯の大会では総合銅賞をもぎ取った。

さて、放送委員会は今年で五十四年を迎える。この間、日本のテレビ・ラジオ業界は大きく変化してきた。今やテ

改めて感じている。久しぶりとメンバーが集まると、当時と同じ懐かしい空気に包まれる。今は、それぞれが信じた別々の道に進んでいるが、あの頃と同じ一つの思いは変わらず残っている。そんな尊敬

できる仲間に出会えたことを誇りに思う。

今でも、何か辛いことにつかる度、無我夢中だったあの頃の自分を思い出したり、当時の仲間と相談に乗ってもらったりすることで壁を乗り越えられているように思う。また大学卒業後放送局で仕事を

する中で、自分で取材をしたり番組を作ったりすることもある。放送委員会での経験が大変役に立っていた。どんな時も支えてくれる仲間たち、そして夢を叶えてくれた放送委員会での三年間という時間は、私にとってかけがえのない宝物である。

レビ・ラジオは人々の娯楽の一部となっている。しかし、このようなマスメディアの本来的役割は「伝える」ということではないだろうか。ただの自己満足・低俗な面白さを提供する役割では決してない。放送委員会の発足から半世紀以上経った今、私達は校内放送の役割、在り方というものを再確認しなければならぬ地点に立っている。「伝える」ということの意味を常に意識してアナウンス、朗読、作品制作や毎日の放送をより充実させていきたい。